

屋久島班人文社会チーム 2004 年度研究概要

1. 土面川土石流訴訟とバホロック土石流災害との言説の近似性（安部竜一郎¹⁾）

(1) インドネシア北スマトラ州バホロック川土石流災害（2003 年 11 月 3 日）

- 250 万 ha の原生林を誇るルーサー国立公園に隣接
- ブキッド・ラワン村を直撃＝オランウータン・リハビリテーションセンターで有名な観光地（ジャワ人、スンダ人、バタック人、ミナン人などのマルチエスニック）
- 午後 9 時ごろ、2 回に渡る土石流。初回は高さ 4m ほど、2 回目が 10m 超（住民へのインタビュー）。2 回目で大きな被害（死者 250 人強と言われる）



写真 1: 破壊されたホテル（04 年 11 月安部撮影） 写真 2: ひしゃげた橋（04 年 11 月安部撮影）

(2) 原因をめぐる論争

- メガワティ演説「上流部の違法伐採が原因」、環境大臣、ランカット県知事も追認。
- NGO：スマトラ横断道路（ラディア・ガラスカ）や上流のダム決壊の影響を指摘。
- 林業大臣：急勾配と豪雨による天災。

(3) 土面川裁判における各主張との比較

事件	土面川訴訟		バホロック川災害	
背景	上流部の拡大造林		違法伐採・横断道路	
アクター	原告	国(林野庁)	知事・NGO	林業省
原因	過剰伐採	軟弱な地質・集中豪雨	伐採・開発	急勾配・豪雨

* 森林の開発主体であるアクターの主張の近似性に注目：利害＞科学？

2. 森林とのかかわりにおけるインセンティブ（浅尾真利子²⁾）

これからの自然とのかかわり方について、まず、屋久島における行政サイドからの展望を示す環境文化村構想、そしてその後実際に行われてきた施策について検討した。これは、1993 年(平成 5 年)に世界自然遺産に登録された屋久島において、それに先立つ 1992 年(平

¹ 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻（関連社会科学）博士課程
e-mail: ryuabe333@ybb.ne.jp

² 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻国際環境協力コース修士課程
e-mail: m_asao@fc4.so-net.ne.jp

成4年)に県により打ち出された構想であり、世界遺産登録の受け皿になっている。理念としては自然のみに価値を置くのではなく、自然と人、両者の共存を目的として掲げている。これまで、自然保護をめぐり、自然に価値を置きすぎるあまりそこに暮らす人々の生活が見過ごされてきたという問題がしばしば指摘されてきたことを考えると、その点は評価できる。しかし調査の中で、構想やその後行われている様々な取り組みに対し、距離を置いている発言に多く出会った。このことは、文化村構想以降の様々な取り組みが、島民からの強いサポートを受けられていないことを示しているとも言える。

本研究では、行政側からの展望と、それに刺激されて行われる数々の施策から抜け落ちてしまっている、自然と人との複雑なかかわりに光を当てる。それによって、今後の自然とのかかわり方、利用の仕方に新たな視点を加えることができると考える。具体的には、①構想とそれに続く施策、②構想の策定プロセス、③共用林・共有林における森林の利用、④現状がつくり出された背景、に焦点をあてる。これにより、現在行われている様々な施策がどのような枠組み、前提に基づいているのか、そして現状との間にどのようなギャップがあるのかを明らかにする。

さらに、屋久島の抱える、地理的特徴、高齢化、一次産業不振などの地域問題と、その解決策としての環境文化村構想の目的・方法は、日本の他の地域にも共通している部分が多い。したがって、屋久島における事例を検討することは、同じ問題を抱える他の地域への示唆も与えることになるだろう。

3. 屋久島の森林ゾーニングをめぐる背景(平野悠一郎³⁾)

(1) 今年度の研究概要(現状)

昨年度までは、屋久島における森林ゾーニングの全体像を把握することにつとめていた。今年度は、既に収集した資料に基づき、個別の森林ゾーニングの制定過程において、どのような利害・思惑が働いたのかを明らかにする作業を行っている。その際、屋久島の森林をめぐる「島外」の動きを把握するため、鹿児島県行政、九州国有林行政にまで調査の対象を広げ、今年度9月に聞き取り・資料収集に赴いている。

(2) 理論的枠組みの構築(課題)

また、個別の森林ゾーニングを、“資源化”というプロセスの実例として位置づけ、その過程を理論化しようと試みている。明治期以降の屋久島における森林ゾーニングは、自然に何らかの価値を見出す“資源化”を前提として行われてきた。したがって、“資源化”の仕組みを明らかにする上での実証題材である。

しかし、そこでは、①森林という資源に内在される特徴や、②森林をめぐるアクターの関係構造が、大きな影響を与えているため、“資源化”のプロセスにおける理論的枠組みは単純には描けない。そこで、前者については、森林の価値そのものの多面性と、価値利用における幾つかの普遍的な要素を想定することで対応していく。後者についても、個別の実証を進める中で、地域外—地域内、主要—対応ゾーニング、といった幾つかの軸が見えつつあり、それらに基づいて各アクターの立場を整理していく。

³ 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻(国際関係論)博士課程
e-mail: hirano_yuichiro@yahoo.co.jp

4. 離島と学問：資源系の解明（王智弘⁴）

「島は不毛地であるというよりは、無人化されたものなのだ。その結果、島はそれ自身の中に最も生き生きとした資源をもちうる」—ジル・トゥールーズ[2003:17-18]がいみじくも言い得たが、島は学問にとってもまさに知的な生産活動における資源であった。

学問上、世界で最も有名な島の1つにガラパゴス諸島がある。1835年にこの島を訪れたチャールズ・ダーウィンは、自然淘汰による生物進化の着想を得て、後に『種の起源』を記した。二世紀足らず経った現在、世界自然遺産に指定されたガラパゴス諸島は、生態系と生物多様性の保護と人間の活動を管理する制度の構築が模索されている(西原・梅津[2004:229-245])。これに類似した試みは、国内でも屋久島、小笠原諸島、御蔵島などで見られる。こうした自然を利用する人間の活動—自然資源の開発—の適正な管理は、持続可能な開発の概念の根本を支えるものでもある。

『種の起源』に先立つ1691年、イングランド人のウィリアム・ペティによる著書『アイアランドの政治的解剖 (The Political Anatomy of IRELAND)』が出版されている。その内容は、軍医であり測量家、また行政官でもあった彼が、17世紀を通じてイングランドの植民的国家になりつつあったアイルランドを政治的動物とみなしておこなった政治的解剖—今日の用語で言うなら社会状態の分析—である。分析の対象には、今日我々が資源から連想するようなもの、例えば土地、産物、あるいは大気や地味も含まれている。ところで、1950年に出版された松川七郎訳による同書の邦訳では、「資源」の原語は「substance」(ペティ=松川[1950:114])となっていて、訳語として一般的に連想する「resource」ではない。なぜか。

本発表における試みは、社会科学的なアプローチによる資源管理研究に新たな方向性を見出すことである。内容は、上述のペティをはじめ、幾つかの離島を扱った学問や論考(主に人文科学分野の)を題材とする。モノと人の関係のあり方が、離島と学問の関係にどのような特徴をもって析出しているかを歴史的概観から明らかにする。そういった分析の結果から、我々は「資源」という言葉が世相に感応した言葉・概念であることを発見する。

以上の展開から、「資源」をセンサーとした天然資源をめぐる社会現象の観測装置を、試験的に組み上げる。そのためにまず、これまで「資源論」として展開されてきた一群の既存研究をレビューしたのでこれを報告する。さらには近年、新しい概念として登場した「地域資源」への言及を踏まえて、本研究の目的として解明を進める「資源系」の概念について説明する。

[引用文献]

ジル・ドゥルーズ「無人島の原因と理由」『無人島 1953-1968』河出書房新社, 2003 年, pp.17-18.

西原弘・梅津ゆりえ「『遺産』としてのガラパゴス諸島の生態系管理の現状と課題」『文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』 国立民族学博物館調査報告 51, 2004 年, pp.229-245.

ペティ『アイアランドの政治的解剖』松川七郎訳 岩波書店, 1950 年, pp.114.

⁴ 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻国際環境協力コース博士課程
e-mail: kk37638@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp